不定期刊行　　第３６７号　　2010.08.25

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」（6770m未踏）偵察行　その3

期待と裏腹の僕の腹具合

７月２８日　４日目にして、すでに曜日の感覚はまったくない。もう完全に日本を離れた世界にいる。そんな今日からいよいよ山への第１ラウンドがはじまるという期待感に胸は膨らむ。当初計画では、本日は叶城（カルギリク）までの予定であったが、「登山基地でもある叶城に泊まると、ホテルの従業員が登山隊が泊まっていることを当局にせずもがなの連絡をしたり、その結果公安や軍の検問があると面倒くさい。」というヌルさんの判断で、ヤルカンド（沙車）泊まりと変更になる。したがって、行程も短いので、午前中はカシュガルの名所アバクホジャ廟と、大バザール、そしてカシュガルの古民家の残る旧城区を観光して回る。アバクホジャ廟は１０年前にも頂上ドーム部の緑の化粧タイルを張っている作業中だったが、今なおそれが継続されていた。何でも、今の技術ではいくら修復してもまた剥離してしまい、直らないのだという。はるかいにしえの技術が今を凌ぐものであったという事実に驚嘆する。この中央アジアの真ん中から唐の皇帝のもとへ嫁いで行き、死した後ふるさとカシュガルに戻るまで遺体が腐ることがなかったとも言われる「香妃」の伝説。そのころの民族は今のウイグル族とは違っていたともいうが、一体この地を舞台に幾つの民族が興亡を繰り返してきたのだろう。アバクホジャ一族とて、その一時の栄華を誇って砂漠の中に消えていったのだ。

ヌルさんの説明ではカシュガルとは、ウイグル語で「光る宝石」または「レンガで作られた町」を意味するという。そんな「カシュガル」だが、カシュガルといえば、バザール、バザールと言えばカシュガルのそれを示すというぐらい有名なのがカシュガルのバザールである。アバクホジャ廟から東へ暫く進むと人、ロバ車、自動車、電動車がごちゃまぜで集まってくるバザールが見えてくる。ここは本当に西域を肌で感じさせる場所。生きるエネルギーが匂って来るようだ。しかし、１０年前に比べればそれも穏やかになったように感じるのは、僕が慣れてしまったからなのか、それともカシュガル自体が洗練されて変わったからなのか、おそらく両方の要素があるのだろうとは思うが、ここが今も昔も民族の十字路として交易の町である点に変わりはない。バザールの路地のあちらこちらではウイグル語ばかりでなく様々な言語が飛び交い、ありとあらゆるものが並べられている。僕はなんとなく腹の調子が思わしくないがヌルさんに勧められるままにシシカバブを一本。ウイグル人の胃袋にとってシシカバブは別腹なのだ。

カシュガルの旧城の民家で

旧城は日干しレンガの昔ながらのウイグル族の家並み。この地域に入るのに、以前はとられなかった入場料が取られた。そのかわり、ウイグル族のガイドが案内をしてくれる。完全に観光地化していたが、日本で言えばさしずめ妻籠や馬籠といったところか。しかし、地区は限定され、以前はここと同じ街並みが広がっていた場所にはブルドーザーがはいり、ク

レーン車が高層アパートを次々と建てている。カシュガルの近代化が急速にウイグル族の生活環境を変えているのは間違いない。そして、町のあちこちに漢族がどんどん増殖しているのも時代の流れか。

ラグ麺の昼食をとってから、ヤルカンドへと車を走らせる。曇り空を見上げながら、ヌルさんが、「ムスターグアタは雪ですね。」という。どこかで情報を得たのかと尋ねると、ヌルさんは「いや私の勘です。」と笑った。町を抜けて小一時間も過ぎた頃カシュガル河を渡る。茶色く濁り水量も多い。このころから、なんとなく身体が重く力が入らない状態になってきた。そしてなんだかやたら眠い。午前中のシシカバブもなんとなく受け入れがたい状態だったのだが、腹具合が極めてよろしくない感じになってきた。車は砂礫の沙漠が続く道をひた走る。舗装状態が悪い道を１００ｋｍ近いスピードで走るので、腹が刺激され、曰く言い難い状態である。天候が悪化してきてぽつりぽつりと雨が落ちてきた。沙漠の雨か！珍しいなぁ、その時はそんな感じでしかなかったのだが。

およそ２時間でナイフの町インギサール（英吉沙）に到着したが、ナイフどころの騒ぎではない。すぐにトイレに駆け込んだ。水溶便である。まずい。明日の入山を前に大事に至らねばいいのだが、トイレを出ても身体に力がはいらず、だるさが襲ってきて立っているのもしんどい。９９年も００年も、０１年もここではたくさんのナイフを買ったものだが、あのグラウンドゼロの一件以来、ナイフの飛行機への積み込みはできなくなったということを聞いた。後日談だが、周さんがここで一本ナイフを買って今回の旅行中大変重宝したのだが、結局深圳へ持ち帰るのはだめということになったようだ。それはともかく、小生は立っているだけで脂汗が出てくる深刻な状況になってきた。

出発前にもう一度用足しをして、今宵の宿泊地であるヤルカンドへと向かった。インギサールからヤルカンドまではおよそ１２０ｋｍ。しかし、この距離が途方もなく遠く感じられた。ホテルへ着くやいなや、ベッドに潜り込む。熱を測ると３８．８度という高熱である。こんな熱はもう何年も経験していない。とにかく何の気力も湧かず、明日の入山のことばかりが気にかかる。他のメンバーはヤルカンドの観光をしがてら、夕食に行くと言うことだったが、僕は一人寂しくベッドで明日からのことを考えて、ただ身体を休めるしかなかった。明日は５０００ｍのセラック峠を越えて３８００ｍのマザーまで入らねばならないが、この状態でそこにはいったら当然高度の影響も相まって何が起こるかわからない。もしここで日程をずらせば、何のためにここまでやってきたのかわからなくなってしまう。用心はしていたつもりだが、調子に乗ってシシカバブを食べ過ぎ羊の脂に身体がまいってしまったのか、それとも昨日の面肺子がまずかったのか。ともあれ、なにが何でも身体を回復させねば、ここに来た意味がないのだ。風邪薬と胃腸薬を飲んで、ひたすら眠ることにした。食事から帰ってきたメンバーがエネルギー飲料、バナナ、カステラ、リンゴジュースを買ってきてくれたが、何も食べる気が起きない。

夜半過ぎ、便意を催したので、トイレへ行く。気がつくと窓の外は大雨が降っておりザーザーと音を立てている。トイレから帰り、横になるとまたすぐに便意を催す。脱水にならないように、枕元においてもらったリンゴジュースを少し口に含むのだが、そうするとまたその刺激で便意が起きてくる。大変に困った状況になってきた。その繰りかえしと雨音、さらには偵察のことが心配で、結局ほとんど眠ることができなかった。結局１５回くらいはトイレに行ったと思う。